杉小次郎と興元寺（一の井手）

むかし、徳山が「野上の庄」といわれちょったころ、野上氏のあとに、杉氏がこの地の領主となった。

杉氏には、剣道の達者な、杉小次郎という二代目がおった。

小次郎には、周姫という、それはそれは大そう美しい妻がおったそうな。

ある日のこと、毛利輝元は、周姫をひと目見て、忘れられんようになったそうじゃ。そして、日がたつにつれて、その、思いはつのり、だんだんと、側室に迎えたいと思うようになってしもうた。

それを知った毛利の家臣たちは、領主輝元のために、周姫をなんとしても奪おうと

計り、周姫をだまして、連れ出してしもうた。

小次郎は、かんかんになっておこったそうじゃ。

毛利家のまわりのもんたちは、こうした小次郎をひどうおそれた。

「杉小次郎は剣の達人じゃし、やけになってなにをしでかすかわからん。しまつしなければ……」

「小次郎をしまつするには、なにか、ええ方法を考えんと……」

考えたすえに、杉小次郎を、戦にかこつけて、船に乗せ、酒をのませて、よったところを、ひと思いに殺してしまおう、ということになった。

そこで、遠石のかこ町（いまは、この地名はのこっていない）の者を船頭にやとい、ある夕方に、近くの船倉から船を出し、遠石から小次郎を乗せて、粭島の方に向かって、船を出した。

船出して間もなく、風が出、海がしだいに荒れてきだした。じゃが、いまさら引き返すわけにいかず、船は、そのまま沖へ向かって進んで行った。

船の中では、酒もりがはじまり、小次郎には強い酒がふるまわれた。
海は、小次郎の運命を見すかしたように、ますます荒れ出した。
「小次郎さま、このしけでは、粭島の瀬戸をこえるのは、無理なようです」
船頭はあきらめて、大島の大須田というところに、船をとめ、とま（カヤであんだ船のおおい）をふいた。
「こうなったら、酒でも飲みあかそう」
酒は、どんどんと運ばれた。もともと酒がきらいでない小次郎は、すすめられるままに、盃の酒を飲みほした。
小次郎がすっかりよいつぶれると、船かくしにかくれちょった刺客が、とび出してきて、小次郎を刺し殺した。
小さな領主の杉家は、大国の藩主の毛利家には、なんにもいえなんだ。
毛利家では、小次郎のたたりをおそれて、さっそく、一の井手の山のふもとにある、杉家の菩提寺である、興元寺にまつることにした。

短い一生を終えた小次郎のなきがらは、一の井手のいんきょ山（いまは、一の井手の墓地になっている）で焼いたそうな。
そのとき、煙がもうもうと西に向かって流れて行った。
「煙でかくれたところは、全部、寺の土地に付けてやろう。よう弔うてくれ」
毛利家ではそういうと、寺に土地をようけ（沢山）あたえたそうな。
じゃが、興元寺にまつられた小次郎は、毛利輝元に対して、よほど無念じゃったんじゃろう。夜になると、よろいかぶとをつけた小次郎の霊が、白い馬にまたがって、興元寺の門からぬけ出し、領地をかけめぐっていたそうな。
興元寺では、ひる間でも門の戸をしっかりと閉じて、小次郎の霊がまよい出ないようにした。
それから、興元寺の門は「開かずの門」といわれるようになった。

（語り手　徳山市上一の井手　兼重治平さん）